

室戸地区のマグロ漁船における漁労長のライフヒストリー研究

1140412 大森 俊之

高知工科大学マネジメント学部

1. 本研究の背景と目的

まずは本研究の背景と目的を述べる。

室戸ではかつて捕鯨が盛んに行われていたが、1906年に新式の銃殺捕鯨が日本でも導入されたことにより、効率的な銃殺捕鯨を用いて広範囲で捕鯨を行うのが一般的になり、室戸の古式捕鯨は廃絶された。そこで、村を挙げて捕鯨に従事していた室戸の漁民たちは他の漁業に乗り出すことになり、その一つがマグロ漁業である。初めは小さな船で近海のマグロを釣っていたが、次第に船の大型化と漁場の遠洋化が進み、室戸のマグロ漁業は1970年代に最盛期を迎えた。しかし、二度のオイルショックや200海里の経済水域の制定などで次第に衰退し、2012年時点で高知県まぐろ船主組合に所属している漁船は13隻のみとなっている。

マグロ漁最盛期の1970年代に漁労長を務めていた人は現在70歳代から80歳代だと見られ、彼らから話を聞ける機会は失われつつある。この機会が完全に失われてしまう前に彼らの言葉や体験をライフヒストリーの記録として残すことが本研究の目的である。また、文化人類学の中で扱われてきたライフヒストリーという枠組みを用いて、漁労長の職業アイデンティティの形成プロセスを解明する。それによってライフヒストリー分析がアイデンティティ形成プロセスの解明に適用できるのかということを明らかにすることが本研究の第二の目的である。

2. マグロ漁船の組織構造

この章ではマグロ漁船の組織構造を述べる。

マグロ漁船には22人から26人の人間が乗っているが、船舶職員法の規定により「船長」・「一等航海士」・「二等航海士」・「一等機関士」・「二等機関士」・「無線通信士」・「衛生管理者」の7人がいないと船を動かすことすらできない。この7人はそれぞれ免許や資格が必要になる甲板での作業をする「甲板員」と甲板員をまとめ上げる「甲板長」には免許や資格が必要ない代わりに立場は低めになっている。しかし、免許や資格を持たなくても立場が上の船員が居る。

それが「漁労長」と呼ばれる役職である。

漁労長はマグロ漁業において操業に関する一切の責任を負っている。漁労長はどこで漁をするのか、いつまで漁をするのか、漁場における操船の指示など漁に関するあらゆることを決める権限を持っている。その一方で航海に関する一切の責任を負うのは船長の仕事である。例えば、海難事故や暴力事件があった時に港で諸手続きをするのは船長であり、漁労長は全く関知しない。前述のように免許や資格を持っている分だけ漁労長よりも船長の方が立場は上である。しかし、船員たちに『親分』と呼ばれ慕われるのは漁労長の方であり、船長よりも漁労長の方が多く給料をもらえることからマグロ漁船での扱いは漁労長の方が上になっている。漁労長には様々な能力が必要とされるが漁場を選ぶことと人をまとめることが最も大きな要素である。

マグロ漁船の持ち主は「船主」と呼ばれる。船主には、漁労長と契約して船という財産と船員たちの命を預けるタイプと船乗りが自ら船を買って漁労長兼船主になるタイプの2つがある。船主が漁労長と契約する場合には、自分の船で成長した船乗りを漁労長に指名するパターンと他船の漁労長を引き抜いて契約するパターンの2つがある。なお、情報源は元船主Y氏への聞き取り調査である。

3. 研究方法

3.1 データ収集方法

本研究においてデータを収集した方法を述べる。

本研究ではマグロ漁船の元漁労長1人にライフヒストリー法を用いて聞き取り調査を行った。ライフヒストリー法とは個人が過去の生活や一生について話した記録を基に、何かを明らかにする手法である。記録として残すという目的上、幼少期から現在までの体験談が必要になるため、本研究ではライフヒストリー法を用いている。なお、元漁労長E氏への聞き取り調査以外にも2つの方法を用いた。1つ目はE氏が使っていた船員手帳を見せていただいたことだ。船員手帳には、誰の船にいつからいつまで何の役職で乗っていたかが

詳細に記述されており、彼の乗船履歴や漁船での立場を時系列ごとにわかりやすく把握することができた。2つ目は元船主Y氏にも聞き取り調査をすることだ。彼はE氏と非常に長い付き合いがあり、互いをよく知りあっているため、E氏のライフストーリーの補足や裏付けとすることができた。これら3つのデータ収集方法から複数の観点でE氏のライフストーリーを調査、分析する。

3.2 調査対象者の概要

本研究でインタビュー調査の対象となった者の概要を述べる。

E氏は室戸岬町に住む70歳の男性で元漁労長である。

Y氏は室戸岬町に住む72歳の男性でマグロ漁船を経営していた元船主であり、E氏を長く雇っていた。

- 1 度目の調査(2013年12月5日):E氏とY氏(合わせて約150分)
- 2 度目の調査(2013年12月17日):E氏とY氏(合わせて約165分)
- 3 度目の調査(2014年1月27日):E氏(約130分)
- 4 度目の調査(2014年1月30日):E氏(約165分)

3.3 分析方法

本研究の分析にはマンデルバウム[1][2]が追究したライフストーリーの分析手法を用いる。マハトマ・ガンディーの人生を例としてライフストーリーを分析したマンデルバウムは、ライフストーリーを分析するにあたって、ある人の人生の諸次元、主要なターニング、その人の適応の特徴的な手法が考慮されるべきであると主張している。彼曰く、次元とは「おなじような基盤に由来している諸経験から構成され、その諸経験がその後のその人の行為に結果としてかかわっているものである」。彼によって実際に言及されている次元は次の4つがある。人の肉体的な成長やそれによって得られた能力を指す生物学的次元、人の感情・態度・内面的な考え方を指す心理的次元、人が自分の住む社会の中でどのように人生を送るのが一般的だったかということを目指す文化的次元、人が住む社会の中でどのような規範・ルールがあったかということを目指す社会的次元である。そして人生におけるターニングポイントを経ることで、人は新しい条件にうまく対処するためにすでに確立された行動のパターンを変えなければならない。その時に内的要因が各次元へと影響を及ぼし、各次元は変化するのである。内的要因が各次元へ及ぼす影響を適応と呼び、ターニングポイントごとに適応は起こる。このことを筆者が独自に図式化したものが図1である。

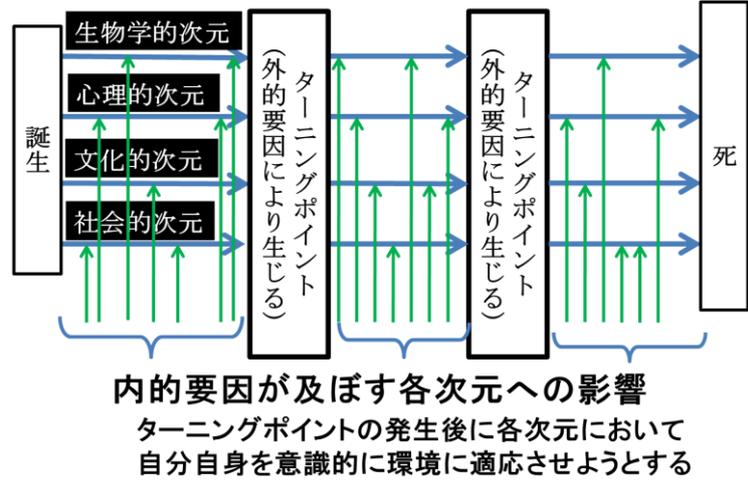


図1 マンデルバウムが追究したライフストーリーの分析手法

本研究では元漁労長E氏の人生から4つの次元にまつわるものを記述する。さらにいくつかのターニングポイントを経て各次元がどのように変化したか、またその時にどのような適応が起こったのかについて分析する。そして漁労長の能力の形成と4つの次元のかかわりについて図で示す。

4. データ収集結果1 (元漁労長E氏の場合)

4.1 年表

漁労長E氏の人生を年表で記載する。なお、E氏の船員手帳の記述から読み取れた航海を丸数字で表した。

1943年(昭和18年)7月10日	室戸岬で生まれる。
1947年(昭和22年)	父親が亡くなる。
1958年(昭和33年)	水産学校に入学する。
1959年(昭和34年)	水産学校を中退する。
1961年(昭和36年)12月16日	①三崎港から第26宝幸丸に甲板員として乗る。 船主は宝幸水産株式会社。
1964年(昭和39年)3月13日	①清水港に帰港する。期間満了により雇い止めになる。
1964年(昭和39年)6月19日	②三崎港から第18伊藤丸に甲板員として乗る。 船主は銚子鮎漁業生産組合。
1964年(昭和39年)12月17日	②清水港に帰港する。本人の申し出により雇い止めになる。
1965年(昭和40年)2月22日	③久里浜港から第3住吉丸に甲板員として乗る。

	船主は住吉漁業株式会社。
1966年(昭和41年)8月19日	③横浜港に帰港する。事業計画終了により雇い止めになる。
1966年(昭和41年)10月4日	④清水港から第8住吉丸に甲板員として乗る。 船主は住吉漁業株式会社。
1967年(昭和42年)9月6日	④清水港に帰港する。本人の申し出により雇い止めになる。
1967年(昭和42年)	船主Y氏と出会う。
1968年(昭和43年)4月27日	⑤室戸港から第8大鵬丸に衛生管理補佐兼甲板員として乗る。船主はY氏。
1969年(昭和44年)9月3日	⑤清水港に帰港する。本人の申し出により雇い止めになる。
1969年(昭和44年)	衛生管理者の資格を取る。
1970年(昭和45年)5月22日	⑥室戸港から第8大鵬丸に甲板員として乗る。 船主はY氏。
1970年(昭和45年)12月24日	⑥焼津港で甲板員から操舵員兼衛生管理者に変更される。
1972年(昭和47年)7月14日	⑥焼津港で操舵員兼衛生管理者から甲板長兼衛生管理者に変更される。
1972年(昭和47年)頃	ローンで家建てる。
1973年(昭和48年)3月19日	⑥高知港に帰港する。本人の申し出により雇い止めになる。
1973年(昭和48年)3月-	海技免状を取るために講習に通う。講習中に漁労長になる話が来て承諾する。
1973年(昭和48年)	海技免状を取る。
1973年(昭和48年)12月	結婚する。
1973年(昭和48年)12月13日	⑦高知港から第18大鵬丸に漁労長兼一等航海士として乗る。船主はY氏。
1975年(昭和50年)1月10日	⑦室戸岬港で漁労長兼一等航海士から漁労長兼一等航海士兼衛生管理者に変更される。
1976年(昭和51年)5月15日	⑦室戸岬港に帰港する。

1976年(昭和51年)5月24日	⑧室戸岬港から第18大鵬丸に漁労長兼衛生管理者として乗る。船主はY氏。
1977年(昭和52年)	長男が生まれる。
1977年(昭和52年)11月11日	⑧室戸岬港で漁労長兼衛生管理者から漁労長兼二等航海士兼衛生管理者に変更される。
1981年(昭和56年)7月23日	⑧高知港に帰港する。
1981年(昭和56年)7月28日	⑨高知港から第18大鵬丸に漁労長兼一等航海士兼衛生管理者として乗る。船主はY氏。
1981年(昭和56年)8月1日	⑨高知港で漁労長兼一等航海士兼衛生管理者から漁労長兼衛生管理者に変更される。
1983年(昭和58年)8月21日	⑨船内で雇い止めになりダーバン港に帰港する。
1983年(昭和58年)9月19日	⑩高知港から第18大鵬丸に漁労長兼衛生管理者として乗る。船主はY氏。
1984年(昭和59年)	次男が生まれる。
1986年(昭和61年)2月1日	⑩高知港で漁労長兼衛生管理者から漁労長兼二等航海士兼衛生管理者に変更される。
1987年(昭和62年)12月30日	⑩清水港に帰港する。
1988年(昭和63年)9月5日	⑪清水港から第63福寿丸に漁労長兼次席一等航海士兼衛生管理者として乗る。 船主は福寿企業株式会社。
1991年(平成3年)4月30日	⑪清水港で漁労長兼次席一等航海士兼衛生管理者から漁労長兼二等航海士兼衛生管理者に変更される。
1994年(平成6年)10月17日	⑪清水港に帰港する。
1995年(平成7年)3月28日	⑫清水港から第55高取丸に漁労長として乗る。 船主は福寿企業株式会社。
1995年(平成7年)4月7日	⑫室戸港で漁労長から漁労長兼二等航海士に変更される。
1996年(平成8年)9月29日	⑫病気のため船内で雇い止めに

	なり室戸港へ帰港する。
1998年(平成10年)頃	この頃まで漁労長としてマグロ漁船に乗り続ける。最後は韓国の漁船に乗っていた。
現在	室戸岬町に住んでいる。

4.2 誕生から漁船に乗るまで

次に元漁労長E氏の人生を述べる。

E氏は1943年(昭和18年)7月10日に室戸市室戸岬町で生まれた。漁師であった父親はE氏が4歳の時に亡くなっており、母親の女手ひとつで育った。そのため父親の記憶はあまりなく、友達が父親と釣りに行っているのを羨んでいた。E氏の幼い頃はやんちゃで暴れん坊だった。ケンカで泣かされたら相手を泣かすまでケンカを辞めなかった。近所でも評判の悪がきだったが、近所の皆にはよくかわいがられていた。小学校の高学年頃から船乗りへの憧れを抱いており、冬にスルメイカを釣りに行くなどしていた。中学校を卒業後、水産学校に通っていたが病気が原因で2年生の時に中退した。中退してからは地元の大人と軟式野球をやるなどして遊んでいた。

4.3 船員時代

中退してしばらくふらふらと遊んでいると、既にマグロ漁船に乗っていた3人の兄たちからマグロ漁船に乗らないかと誘われた。3人の兄はそれぞれ別の船に乗っており、長兄は甲板長を務めていて次兄は機関士を務めていた。E氏はどちらの船に乗るか悩んだが、漁のことを覚えるのが先決だと考えて長兄と同じ漁船に乗ることに決めた。

神奈川県三崎町の水産会社のマグロ漁船に乗ることを決めて、現地に着いて出港するまでの間にも、水産会社で船員チームと社員チームに別れて野球をすることがあった。1961年(昭和36年)12月16日に神奈川県三崎で水産会社のマグロ漁船に甲板員として乗り始めた。E氏が初めて乗るマグロ漁船であり、まだ何も分からないので他の船員たちに道具の作り方や漁のやり方などを教えてもらったり、見て覚えたりした。E氏は船員の中でもっとも年下なためまだ重要な仕事には係わらせてもらえず、船の掃除や飯炊きなどの素人でもできるような雑用を多くやらされたが、1年長く乗っている先輩たちに負けられないと負けん気を発揮し仕事に励んだ。船に誘ってくれた兄から直接に指導を受けることは無かったが、甲板長の下倉庫係という役職の人が色々教えてくれた。その人をはじめとして、E氏は他の人の話をよく聞き、素直に仕事に努めた。そのおかげで船内ではよくかわいがられ、港に着いた際には船長や無

線通信士らに色々連れて行ってもらった。彼らにレストランに連れて行ってもらった時にはE氏は洋食を食べたことが無く、ナイフとフォークを手にしてどうやって食べる物なのか教えてもらうことがあった。

そのようなことがあった初めての航海は2年3ヶ月にわたるものであった。航海を終えて日本へ帰ったが、乗っていた漁船が運搬船になったために1964年(昭和39年)3月13日に静岡県清水で雇い止めになった。そこで、室戸に帰って失業保険を貰って生活することになったが、人からの紹介で1964年(昭和39年)6月19日に神奈川県三崎で別の会社の漁船に再び甲板員として乗ることになった。この航海は1964年(昭和39年)12月17日までの6ヶ月と短く、トラブルもなく特別に褒められるようなこともなかった。

1965年(昭和40年)2月22日からは小型の漁艇4隻を積んだ大型船に甲板員として乗った。この船には高知県出身者が多く、一等航海士・二等航海士・船長によくかわいがられた。この大型船での航海中に、100人ほどの船員を甲板の2組と機関の1組の計3チームに分けて野球をしたことがあった。E氏は甲板の船長のチームに入り優勝し、景品としてパーカーの万年筆を貰った。また、この船ではマグロ漁で餌として使う冷凍サンマを調理して食べることもできるなど比較的自由に過ごした。

1966年(昭和41年)8月19日にこの船を降りて、1966年(昭和41年)10月4日から1967年(昭和42年)9月6日まで同じ会社の小さな船に甲板員として乗った。1967年(昭和42年)にE氏が船を降りて地元へ帰って過ごしていると、船主Y氏と契約していた漁労長の紹介でE氏はY氏と知り合った。そして1968年(昭和43年)5月からY氏の船に甲板員兼衛生管理補佐として乗り始める。この時の航海ではマグロの水揚げ高の日本記録を作った。この航海は1969(昭和44年)年9月3日まで続いた。

1969年(昭和44年)に船を降りた後、衛生管理者の資格を取った。1970年(昭和45年)5月22日に再びY氏の船で甲板員として次の航海に出ている。1970年(昭和45年)12月24日からは操舵員を勤めており、1972年(昭和47年)7月14日から1973年(48年)3月19日に船を降りるまでは甲板長を務めていた。また1972年(昭和47年)頃に結婚し、500万円の20年ローンで家を建てた。その際はY氏がローンを肩代わりした。1973年(48年)3月19日に海技免状を取得するためにY氏の船をいったん降りている。

海技免状を取るための講習中に先輩漁労長の推薦で漁労長になる話が来たが、E氏はまだ漁労長になる自信がなかった。甲板員をまとめ上げる甲板長を務めていたことから、人間をまとめることや船乗りとしての経験には問題なかったが、航海士や船長を経験した

ことがなく漁場に関する知識も足りないと感じていたからだ。しかし、兄2人が高知で漁労長をしていたことから兄やその知り合いに指導を受けることができ、推薦してくれた漁労長の助けもあって、E氏は『勉強しながら漁労長をやるより仕方ない』と考えて漁労長になる決意をした。

4.4 漁労長時代

1973年(昭和48年)12月13日から1976年(昭和51年)5月15日までの航海でE氏は初めて漁労長として船に乗った。漁労長になったばかりの頃は無線で他船の漁労長に相談して漁場を決めていた。漁労長は操業に関する責任者なので、その立場上、同じ船内の船員に相談することはできなかったからだ。その後の1976年(昭和51年)5月24日から1981年(昭和56年)7月23日までの航海でも漁労長として漁船に乗った。この航海が終わる頃には漁労長として7,8年ほど働いたことになり、一人前の漁労長としての自信が身に付いた。この7,8年の間に漁労長仲間” 助けてもらう漁労長” から” 助け合える漁労長” に成長し、後輩の漁労長を助けることもあった。この航海の途中、1977年(昭和52年)には長男が誕生している。

その後も1981年(昭和56年)7月28日から1983(昭和58年)年8月21日までの航海、1983(昭和58年)年9月19日から1987年(昭和62年)12月30日までの航海で漁労長を務めた。この航海を最後にY氏の船からは降りている。なお、1984年(昭和59年)には次男が誕生している。1988年(昭和63年)9月5日からは別の会社のマグロ漁船に漁労長として乗り、1994年(平成6年)10月17日まで航海を続けた。そして1995年(平成7年)3月28日から1996年(平成8年)9月29日まで同じ会社の別の漁船で漁労長を務めた。この船を降りた後は平成10年頃まで韓国の漁船で漁労長を続けていた。平成10年頃に漁師を引退することになるが、漁労長にまで登り詰めることができたので船員生活に後悔はなかった。船員生活の中頃からE氏はマグロ漁が終わりつつあることを悟っていた。その通り現在、室戸のマグロ漁業は廃れてしまった。

4.5 引退後

現在は妻や孫とともに室戸岬町に住んでいる。孫にはマグロ漁船と港の写真を見せて『おじいちゃん、この船に乗ってこんなに大きなマグロを釣っていた』と話してやることもある。

現在でも船主のY氏や船の乗組員と付き合いがあり、それがE氏の財産であり生きがいでもある。また、マグロ船を降りた後も小さな漁船で釣りに行くことがあるなど漁師らしさは残っている。

5. データ収集結果2 (元船主Y氏の場合)

5.1 誕生から就職まで

この章では元船主Y氏の人生を述べる。

Y氏は1941年(昭和16年)に室戸市室戸岬町で生まれた。大学在学中の1960年(昭和35年)に、マグロ漁船を経営していた父親が亡くなり、弟と共に漁船を受け継ぐことになった。受け継いだマグロ漁業はギリ貧状態で父親の借金も残っていた。

5.2 会社員から船主専任になるまで

1962年(昭和37年)には大学を卒業して一部上場企業に就職してサラリーマンになった。サラリーマンをする傍ら、漁船が日本へ帰ってきた時には仕事を休んで室戸へ帰り、漁船のマネジメントをしていた。その際には年上で経験のある知り合いからアドバイスを貰っていた。サラリーマンとマグロ漁船経営の二足のわらじを履き続けていた1967年(昭和42年)にマグロ漁船の漁労長の紹介でE氏と知り合った。翌年にはE氏を自分の船に乗せることになった。その時の航海ではマグロの水揚げ高の日本記録を作り、Y氏は安芸郡の長者番付に名前が載った。

5.3 船主専任時代

マグロ漁船経営を順調に続け、借金を減らすことができたので1970年(昭和45年)に新しくマグロ漁船を買った。その際に、アドバイスをくれていた知り合いが経営に手を出そうとしてきたので、それを防ぐためにY氏は会社を辞めて室戸へ帰り船主を専任することに決めた。手切れ金を渡して知り合いと手を切った後は元からあった漁船と合わせて2隻の経営を本格的に始めた。

長い船主生活の中でY氏自身はマグロ漁船の経営をするだけで沖合に漁に出たことは一度も無かったが、日本を出港する時には港まで毎回見送りに行っていた。不漁で漁を延長することが決まった時にはケーブタウンまで慰問に行き、宴会を開いて船員たちを激励したことがある。Y氏の30年以上にわたる船主時代にはE氏を含めて10人以上の漁労長と付き合いがあった。その中でY氏の船で漁労長に昇格したのはE氏と数人だけで、それ以外は他船からの引き抜きだった。

Y氏は1999年(平成11年)までマグロ漁船の経営を続けたが、政府の減船政策に則り、マグロ漁船を廃業することを決めた。

5.4 引退後

現在でもY氏は室戸岬町に住んでおり、当時の漁労長や船員たちと付き合いがある。例えば元漁労長E氏の他にも、一緒に酒を飲み交わすような仲の元甲板長が居る。

6. 漁労長E氏の分析結果

6.1 生物学的次元

ここでは4章で述べたE氏の人生をマンデルバウムの図式に則って分類する。まずはE氏のライフヒストリーから生物学的次元にまつわるものを述べる。

E氏の父親は力が強く、E氏とは親子ほど年齢の違ういとこが若い時に40歳ぐらいの父親に力では敵わなかった。また、父親は石を担ぐ力自慢の場で30貫(112.5kg)の石を担ぐほどであった。親戚の内では『息子の中で誰も似た者は居なかった』(=それほど力がある者は息子の中には居なかった)と言われていたが、そうではなかった。E氏も元から体力がある方であり、それは成長と経験によって鍛えられていった。

E氏の通っていた中学校は田舎の小さなものだったから体育会では複数の競技に選手として出なければならなかった。彼は相撲・ソフトボール・駅伝などに出ることになった。当時のE氏は短距離走が苦手だったが、駅伝などの長距離走は得意だった。駅伝の4kmのコースのうち、3kmほどの地点まではつらいがそこから先は逆に楽になる。『もう4kmが終わりなのか』と思うほどだった。

E氏は最初の船に乗ってから降りるまでの2年強の間に72キロから80キロ台にまで体重が増えた。マグロ漁船は一日四食で大体3時間ごとに食事を摂るが、2時間も経てばお腹が空くのでたくさん食べていたという。この体重の増加はただ太っただけということではなく、筋肉が付いていったことも原因である。また、彼は同年代の人と比べて身長こそあまり変わらなかったが、体格が良かった。昔のマグロ漁では縄を引くために力が必要だったので体格が良いことは大きなメリットになった。初めて漁に出た時は縄を引くのに息が切れていた。同じようにして5,6歳年上の人でも縄を引っ張っているのに、彼らはいくら引っ張っても息が切れなかった。E氏は『強いな、どうやっているのだろう』と感心し、自分も一層頑張ることを決意した。その後、自分の限界まで力を出すように仕事をしているとだんだんと慣れていった。

E氏は船に乗り始める前から、海に潜って魚を鉈で突くのが好きだったが、始めは海に潜るのは息が持たなかった。しかし、潜り続けるにつれて慣れていき、息が長く続くようになっていった。宝幸丸に乗る時に健康診断を受けて肺活量を測ったが、普通の人の肺活量が4000-4500ml程度であるところでありながら彼の肺活量は

5500mlもあって『E、すごい肺活量だな。そんなにあるのか』と先輩に驚かれた。また、後に第3住吉丸に乗った時に水中のプロペラに縄が絡まったことがあった。親しかった機関長に『おいE、お前はよく海に潜っていたんだろ』と言われて、水中に潜って縄を切る仕事を任されて見事に成し遂げた。このように他の人にはできない仕事をやることで上の人に評価され、信頼されるようになった。信頼されたことがE氏の自信になり、彼の人生を方向付けるものになった。

6.2 心理的な次元

次に心理学的次元についても同様に述べる。

E氏の幼い頃は負けん気が強く、やんちゃな性格をしていた。ケンカをして泣かされても、相手を泣かし返すまではケンカを止めなかった。初めてマグロ漁船に乗った時も一つ年上の人に負けてはいけなと思って、どうすれば仕事を早くこなせるかということを考えていた。そして、優れたやり方をしている人から学ぶのが一番だと感じて、人のやり方を見て覚えることにした。それから漁労長になるまで、たとえ上の立場に立っていても良いと思ったやり方を積極的に人から学んで仕事を早くこなせるように改善していった。このような負けん気があったからこそ、やんちゃな性格を抑えることができたと言える。彼は初めての航海で人の話をよく聞き、素直に仕事に励んだために皆にかわいがられた。その航海から日本へ帰って来た時には、やんちゃな性格は既に鳴りを潜めていたのだ。以前のE氏を知るとこからは『お前は180度変わった』と言われた。自身の変化についてE氏は気づいておらず、いとこの言葉で初めて気づかされた。

また、彼は人に騙されることが嫌だと子供の頃から感じており、自分が人を騙すようなことは絶対にしてはならないと考えていた。最初の航海で素直に務めた事が功を奏したこともあって、その思いは強くなったと思われる。自分の子供や孫へのしつけでも『嘘をつくのは絶対にかん、言うな』と厳しく言っていたことからこの考えは現在に至るまで長く保持されているものだと言える。同様に漁船での経験から『知ったかぶりをするな、聞け』と子や孫に言っていて聞かせている。聞けばちゃんと教えてくれるのに知ったかぶりをすると、かえって怒られたり教えてもらえなくなったりするからだ。この発言からも正直に言う事を非常に重んじていることが分かる。

6.3 文化的次元

次に文化的次元についても同様に述べる。

E氏は幼い頃に父親を亡くしている。彼は『もしも父親が生きて

いれば自分は漁師にはならなかつたらう』と語っている。しかし、当時の室戸で最も手取り早い働き口はマグロ漁船に乗ることだった。体が丈夫であれば誰でも乗ることができたほどである。漁師町である室戸では魚への興味を幼い頃から叩き込まれており、マグロ漁船に憧れる子供は多かつた。彼もこの影響を強く受けていた。小学生の頃には友達が父親と釣りに行く姿を見て羨むことがあつた。父親が居ないからこそ余計に漁船への憧れを抱くようになったのだ。彼の3人の男兄弟が全員マグロ漁船に乗っていたことや彼の息子が東京の漁具資材店に勤めていたことから、室戸にこのような認識が長く存在したことは疑いようもない。

また、漁師町である室戸では事業としての漁業だけでなく遊びとしての漁業が行われることも多かつた。そのため、子供の頃から漁船に乗る機会は多かつた。E氏も小学生の頃にスルメイカ漁船に乗せてもらったり、マグロ漁業に携わる前にもマグロ漁を経験したりしていた。これらの経験で漁船に乗るのに慣れていたために彼は初めて航海に出た時に船酔いすることはなかつた。彼は漁師町で生まれた恩恵を大いに受けていると言える。

6.4 社会的な次元

次に社会的な次元についても同様に述べる。

マグロ漁船で初めて漁労長になる時は船長から出世するのが一般的であつた。また、無線通信士が情報収集をしているうちにノウハウを蓄えて漁労長になることも多かつた。その一方でE氏は船長を経験せずに甲板長から漁労長になった珍しいケースである。いずれのケースにおいても、信用できる数人の部下を引き連れて乗ることで船内の統率を取りやすくしていた。部下に信頼できる者を置いておかないとクーデターが起きる場合があるからである。幸いなことにE氏の船でクーデターが起きたことは一度もなかつた。なお、初めて漁労長になる者は前任の漁労長や知り合いの漁労長に漁場の情報を教えてもらいながら一人前になることがほとんどである。失敗することが出来ない漁労長だが、立場上船内の人に頼るわけにはいかないからである。E氏も例外ではなく、漁場に関する情報に自信がないのを前任の漁労長に支えてもらったり、経験豊富な兄たちに助けてもらったりしながら一人前になった。

そして漁労長の気質として、お互いに心を開いた者同士でないと本音は言わなかつた。漁労長は少しでも多く魚を釣ってやろうという漁師根性を持っており、互いに対抗していたためである。ただし、互いに信頼している漁労長グループでは暗号を交換しておき、漁場に関する本当の情報はそれでやり取りしていた。互いに漁場を教え合うので一緒に漁をすることも多く、知らない船はなかなか入って

来られないようにしていた。E氏は兄のグループ船や多くの知り合いと漁場の情報を共有していた。

漁労長が船を降りる時には、後を譲る部下に漁労日誌を置き土産として渡すことがある。漁労日誌は漁労長の財産のようなもので、受け継いだ部下はそのデータを参考にして新たな漁労長として歩み始める。E氏自身も韓国の漁船を降りて引退する際に、漁労日誌を部下に渡して次の漁労長を任せた。自分が受けた恩を次の人に返すルールが暗黙の内にあつたと言える。

6.5 ターニングポイントと適応

次にE氏のターニングポイントとその時に生じた適応を述べる。

E氏にとっての1つ目のターニングポイントは初めての航海である。幼いころに父親を亡くしたE氏は父親がいないからこそマグロ漁船に憧れてマグロ漁船に乗ることに決めた。彼はこの航海で十数キロも体重が増えた。マグロ漁船に乗るようになって食事を多く摂るようになったことや力仕事によって筋肉が付き屈強な体つきになったのが原因だ。また、持ち前の負けん気を発揮しながら人の言うことをよく聞き、素直に仕事に励んだことで、この航海を終える頃には彼のやんちゃな性格は抑えられた。

2つ目のターニングポイントは6回目の航海である。彼はこの航海で操舵員と甲板長をそれぞれ初めて経験した。操舵員を務めた時に彼は初めて船の舵を取った。船の舵を取るための理論は分かっていたので操作さえ覚えれば慣れるのに時間はかからなかつた。甲板長を務めた時には人をまとめる能力がだんだんと身に付いて行つた。しかし、甲板員をまとめる立場に立つたため仕事は忙しくなつた。その一方で、海技免状を持っているだけでなれる航海士は、仕事が少ないのにもかかわらず給料が多くなる仕組みになつたので甲板長をずっと続けるのは無謀だと考えて自分も海技免状を取ることを決意した。

3つ目のターニングポイントは7回目の航海である。E氏はこの航海から漁労長を務めることになった。漁業の全ての責任を負う対場にあるからには失敗することは許されないと彼は考えていた。漁場の選び方に自信がなかつた彼は前任の漁労長や兄とその知り合いに助けられながら漁労長を務めた。そして次第に一人前の漁労長になっていき漁労長としての自信を付けていった。

6.6 マンデルバウムのライフヒストリー手法を用いたアイデンティティ形成の分析

以上の4つの次元とターニングポイント・転換を踏まえてE氏的能力とアイデンティティ形成のプロセスを明らかにする。労働者

のアイデンティティ形成プロセスの解明は現代社会で重要だとされており、各分野で多くの研究がなされている。中でも教育学の分野で教師のアイデンティティ獲得に関する研究は盛んであり、山田莉那(2013) [3]は以下のように述べている。

既存研究ではアイデンティティ形成において教師が Asset (資産) を蓄積しているという理解で行われていたが、この理解では教師のアイデンティティ形成の発展・発達プロセスが教師によって異なるということ表現できていなかった[4]。また、アイデンティティ形成の発展・発達プロセスは Asset (資産) の蓄積という直線的なものではなく、行ったり来たりを繰り返す動的なものである[5]。

これらを踏まえて山田莉那の論文では資産を獲得し、蓄積することの繰り返しがアイデンティティ形成のプロセスだと定義している。本研究でもそれに倣い、E氏のアイデンティティ形成プロセスを例にして、マンデルバウムの図式がどこまで適応できるか検討していく。そのために漁労長としての能力の形成プロセスとマンデルバウムが提唱した4つの次元とのかかわりを以下の表(図2)にまとめた。

	漁場を選ぶ	人をまとめる
生物学的次元	屈強な肉体で人にはできない仕事をして評価された結果、操舵員などの役職で漁場に関する知識を付けた。	該当なし
心理的次元	先輩にかわいがられたため、ネットワークに受け入れられやすく、漁場の情報を多く蓄積することができた。	嘘をつかない誠実な性格だったため、船員たちはよくついてきた。
文化的次元	室戸出身者の漁労長は多く、地縁からなるネットワークに参加できた。	同郷出身者の多い室戸の漁船に乗ったため、話が合いやすく人をまとめるのにも役立った。
社会的次元	前任漁労長の漁労日誌を受け継いで学んだ。 信用できる漁労長同士で組まれる伝統的なネットワークから漁場の情報を得た。	該当なし

図2 漁労長の能力の形成プロセスにおける4つの次元の対応

漁場を選ぶ情報は、信用できる漁労長同士で組まれるネットワークで共有されるのが伝統的になっている。先輩によくかわいがられたE氏はこのネットワークに快く受け入れられた。その上、マグロ漁業が盛んであった室戸生まれだったために地縁によるネットワークにも参加でき、より多くの情報を蓄積して漁場を選ぶ力を身に付けた。また、漁労長が引退する時には部下の次期漁労長に漁労手帳を託すのが暗黙の了解になっており、E氏も前任の漁労長の漁労日誌から漁場を学んだ。さらに、若い頃から人にはできない仕事を屈強な肉体でこなしてきたことが上の人に評価されて操舵員や甲板長などの役職に就くことができた。それらの役職を通じて漁場に関する知識を付けたことが後に漁場を選ぶ力にも繋がっている。

人をまとめる能力については、E氏が誠実な性格で嘘を絶対につかなかったことから、船員たちにだんだんと慕われていく過程で徐々に身に付いた。また、E氏は室戸出身者で船員生活の大部分は同じく室戸出身者のY氏の船で過ごしたため、必然的に船内には同郷出身者が多かった。ゆえに親近感を抱かせたり、話を合わせやすかったりしたため、室戸出身であることが人をまとめる力に役立ったと言える。

6.7 結論

以上のように、マンデルバウムの図式を用いることで漁労長が能力を獲得するプロセスを4つの次元から見ることでアイデンティティの形成プロセスを抽出化することができた。このことから文化人類学で用いられてきたライフヒストリー分析がアイデンティティ形成プロセスの解明に適応できることが確かめられた。そして図2の6つの項目を見ると、漁場を選ぶ能力は主にネットワークに参加することで身に付いていることが分かる。同様に人をまとめる能力はE氏の親しみやすさから身に付いていると言える。よって表の各項目はそれぞれ完全に独立したものではなく別次元の同能力同士は互いに関連していることがあると言える。

参考文献

- [1] L. L. ラングネス, G. フランク. (1993). ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ.
- [2] Mandelbaum, David G. (1973). "The Study of Life History: Gandhi." *Current Anthropology*, 14(3):177-206.
- [3] 山田莉那. (2013). 叱り体験が教師のアイデンティティ形成に与える影響に関する研究. 高知工科大学卒業論文.
- [4] Akkerman, S. F. and Meijer, P. C. (2011). A dialogical approach to conceptualizing teacher identity. *Teaching and Teacher Education*, 27, 308-319.
- [5] Volkmann, M. J. and Anderson, M. A. (1998). Creating professional identity: Dilemmas and metaphors of a first-year chemistry teacher. *Science Education*, 82(3), 293-310.